

副詞「せいぜい」の意味変化

—近代語を中心に—

林 禎 映

1. はじめに

現代語の副詞「せいぜい」は、次のように使われている。

- (1) a. 妻は、卓袱台のまんなか、緑色のちいさな蠟燭を三本立てたパースデーケーキを飾り、そのまわりにせいぜい買い集めた子供の好物をならべて、わたしたちを席につかせました。それから、マッチで三本の蠟燭に火を点しました。

(三浦哲郎『忍ぶ川』1960年)

- b. 「おい加藤、人生は短いんだ。せいぜい楽しく遊ぼうじゃあないか。けちけち金のために、なんになる。それよりも、その金で女でも抱いて見ろ、いいぞ」

(新田次郎『孤高の人』1969年)

- (2) a. 「あなたね、いま全国に歌手志望の男女がどれくらいいると思いますか。十万人ですよ。常時十万人の歌手志望者がいるのです。そのなかから毎年歌手としてスタートできるのが二十人そこそこです。そしてさらにその二十人がふるいおとされ、歌手として残るのはせいぜい五人か六人というところです。(後略)」

(立原正秋『冬の旅』1973年)

- b. 印刷機の職人といっても、仕事そのものはいたって単純で、せいぜいミシンの操作をおぼえる程度のものですぐに捺染の機械を動かすことができました。

(権名誠『新橋烏森口青春篇』1987年)

「せいぜい」は、(1)では、「できるだけ、できるかぎり、精一杯」などに類似した意味で用いられるのに対し、(2)では「たかだか、たかが」に類似した意味で用いられている。従来の研究では、両意味のなかでも現代語の「せいぜい」は、(1)のような「全力を尽くす様子」を表す様態的な意味ではなく、多くの場合(2)のような「多く見積もってもそれぐらいの程度にすぎない」という見積もった「上限」や「限度」を表すとりたてた意味で用いられる使用傾向が見られるとされる¹。このような現在の使用傾向によって、実際(1)は、ただ単に「全力を尽くす様子」で解釈されるのではな

く、(2) のもつ「できる範囲が限定され、その限度または上限以上のことはできない」という限定的な意味にも読み取れて、「たかが知れているけれど」または「たいしたことにはならない(だろう)が」できる範囲でなんとか頑張る」という否定的なニュアンスが感じられる場合がある²。本稿では、副詞「せいぜい」のもつ(1)と(2)の使われ方がどのように関係しているかを明らかにすべく、以下2節では先行研究を概観した上で本稿の目的を述べ、3節～5節では「せいぜい」が副詞的用法で使われはじめる明治以降の近代語³を中心に、「せいぜい」の使用状況の記述とその意味変化について考察する。

2. 先行研究の概観、および本稿の考察点

「せいぜい」の意味記述に関する先行研究をみると、まず、「せいぜい」の意味・用法について本格的に論じたものに、安部2005・2006・2012が挙げられる。安部2005・2006・2012は、現代語の「せいぜい」の意味分析を行った一連の考察で、安部2006では、「せいぜい」の用法を「できるだけ」と類似した意味と「たかだか」に類似した用法の二つに分け、後者の「せいぜい」を、程度化された表現と共起するという特徴をもつ「とりたて用法」としている。その後、安部2012では、とりたて用法の「せいぜい」を取り上げ、安部2006で述べた「程度化された表現と共起する」という構文的特徴について、「X/Y程度ダ」というように、ある物事について、程度性の側面から、どの程度かを述べる文(節)に共起する」と再定義している。さらに、安部2005・2012では、「せいぜい」と類似した表現として「たかだか、たかが」(安部2005)や「多くても、ても、としても」(安部2012)を取り上げ、両者間の意味的、構文的特徴における相似・相違についても述べている。

次に、工藤1977・1982・2000においても、「せいぜい」は「とりたて副詞」の観点から分析されている。工藤1997は「せいぜい」を「文中の特定の対象(語句)を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞⁴」の一つに分類した上で、その意味について「少くとも」「せめて」とは逆に、対象の語句を〈最大限の見積り〉として取りだすことを表わすものや「対象を〈たいしたものではない〉とするマイナスの価値評価性が含まれているもの」と述べている。その後の工藤1982・2000は、陳述副詞の全体像を捉えているもので、工藤1977の「限定副詞」を「とりたて副詞」という名称に変え、「叙法副詞」「評価副詞」とともに陳述副詞の下位類として位置づけている⁵。

また、類義語との相似・相違の観点から「せいぜい」の意味記述を行ったものに、森田1989と飛田・浅田1994がある。森田1989は、「せいぜい」に「ある限界内での努力を尽くす」意味と「ある限界内での努力を表すところから、“どんなに努力してみてもそ

の限度を超えない”という逆の見方」をもつ二つの意味があるとしている。しかし、安部の一連の研究（2005・2006・2012）では、森田1989の言う「努力」という視点では「せいぜい」の二つの意味の違いを説明しきれないと指摘し、その例として次の（3）を挙げている。例（3a）は（3b）の「たかだか」と類似した意味をもち、「台風の被害で植木が倒れる」ことは「努力」では説明できないとしている。一方で、飛田・浅田1994では「せいぜい」を「最大限（の程度）に言及する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語」とした上で、具体的な「せいぜい」の意味記述においては、森田1989のように「努力」という術語を用いている。

- (3) a. 台風の被害といっても、セイゼイ植木が倒れるくらいです。安心してください。
b. 台風の被害といっても、タカダカ植木が倒れるくらいです。安心してください。
(以上、安部2006の例（9）)

上記の先行研究では、現代語の「せいぜい」について意味記述を行い、二つの意味をもつとしている。一方、向坂2009は、1947年から2007年度までの国会会議録を調査し、「せいぜい」の用法変化について考察し、「せいぜい」には、従来の意味分析にも見られる「できるだけ、精いっぱい」に類似した用法と「たかだか、たかが」に類似した用法のほかに、次の（4）のように、「せめて」に置き換えられる用法も見られると主張している。この「せめて」に類似した用法の「せいぜい」は、構文的に「できるだけ、精いっぱい」のように「(希望・命令・依頼・意志・期待などを表す) モダリティ表現」と共起すると同時に、「たかだか、たかが」のように「(数量詞や「ぐらい」などの) 程度化された表現」とも共起すると述べ、三つの用法が連続的であると結論づけている。

- (4) 九月始まるまでという一ヵ月しかありませんね。それはもうちょっと長くしてもらわないと向こうの人の気持ちに合いませんよ。注文しておきます。せいぜい三ヵ月ぐらいやってください。
(向坂2009の例（22）)

以上のように、「せいぜい」の意味・用法に関する先行研究では、「せいぜい」の意味として、「できるだけ、精一杯」に類似した意味（以下、意味①）、「たかだか、たかが」に類似した意味（以下、意味②）、「せめて」に類似した意味（以下、意味③）の三つが挙げられている。ただし、現代語の「せいぜい」は、三つのなかでも主に意味②で用いられており、意味①で解釈される「せいぜい」は慣用的な表現となりつつある⁶。しかし、現在の「せいぜい」には意味②だけでなく、実際慣用的な表現として意味①の「全力を尽くす様子」を表す情態の意味が存在している。このことから、森田1989の「努力」という説明や向坂2009の「せめて」に類似した意味についてはあらためて考える必要があると思われる。

そこで、本稿では、「せいぜい」が副詞的用法で使われはじめると見られる明治以降

の近代語（明治・大正期および昭和初期の例）を中心に、「せいぜい」がどのように用いられているかを調査し、「せいぜい」の意味変化について考察する。具体的には、森田1989の「努力」という意味が「せいぜい」の意味変化にどのようにかかわっているのか、また向坂2009で言う「せめて」に類似した「せいぜい」の例が意味変化の過程上、どのように現れているのか、さらに「せいぜい」がどのようにして現在のような「たかだか、たかが」に類似した用法に落ち着くようになったのかについて考察する。今回調査した資料については、稿末の調査資料一覧に記してある。なお、以下で挙げる用例の所在は作品名、成立年、必要に応じて依拠本のページ数などで示した。引用の際、踊り字や漢字表記などで一部表記を変更した箇所があり、また依拠本における振り仮名は、必要と思われるもの以外は大幅に省略した。

3. 「せいぜい」の出自と初出例の意味

「せいぜい」の語源について、山口佳紀編『新語源辞典』（2008）に、中世には「真心、誠心の意の『精誠』があった。明治以降、中世の『精誠』の代わりに、『精々』が精一杯の意で使われるようになり、さらに、『力を尽くしたとしても』の意にもなった」とあり、「せいぜい」の語源を漢語の「精誠⁷」と見ている。明治期以前の中世・近世の資料を見てみる⁸と、「精誠」は、次の例（5）～（9）のように「精誠を尽くす」または「精誠を抽んでる」という形で、名詞的用法として用いられている。

- (5) しかるに、ひそかに一心の精誠を抽で、孤嶋の幽祠に詣、瑞籬の下に明恩を仰ぎ、
（『平家物語』巻第五・1240年頃）
- (6) 加様二功ヲ積、日ヲ重テ、御祈ノ精誠ヲ盡サレケレドモ、三年マデ曾テ御産ノ御事ハ
無リケリ。
（『太平記』巻第一・1371年頃）
- (7) 「(前略)さらぬ外は此山より西へ越えさせ給ふな」と、精誠をつくし、祈誓し給ひけるこそ、十六のさかりにはおそろしき。
（『義経記』巻第二・15C前）
- (8) 迷える衆生をみちびかん精誠をぬぎんで給うことここに切なり
（『天草本平家物語』序・1592年）
- (9) 頼光御覧じ。先以某が病中を悲しみて。精誠を盡さるの段。
（浄瑠璃『夏祭浪花鑑』1745年初演）

これらの中世・近世の例と関連して、17世紀初頭成立の『日葡辞書』（1603～04年）を参照すると、「Xeijeiせいぜい（精誠）」の項目があり、次のような記載が見られる。そこには、『新語源辞典』（2008）で「せいぜい」の出自とする「精誠」が載っており、上記の中世・近世の例と同様の例を挙げ、「精励、熱意と愛情、あるいは厚情」の意をもつとある。

- (10) Xeijeī. せいぜい (精誠) 精励, 熱意と愛情, あるいは, 厚情. 例, Xeijeiuo nuquinzur u, 1, tcucusu. (精誠を抽んづる, または, 尽す) ある物事に力を注ぐ, または, よく心遣いをし, 励みつとめる, 愛情をこめてする, など (『邦訳日葡辞書』745~6頁)

では、次に明治以降の資料をみると、興味深い記述が『和英語林集成』に見られる。「せいぜい」は『和英語林集成』の初版(1867年)には掲載されておらず、再版(1872年)と三版(1886年)に載っている。また、(11)の再版と比べてみると、(12)の三版には「to the utmost, as far as possible」の記述が加わっていることが分かる。

- (11) SEI-ZEI, セイゼイ, 精精, *adv.* Again and again, over and over again, repeatedly. —*tanomimashita*, I have asked him again and again. Syn. KUREKURE.
(ヘボン著『和英語林集成』(再版)1872年)

- (12) SEI-ZEI セイゼイ 精精 *adv.* Again and again, over and over again, repeatedly, to the utmost, as far as possible: —*hataraku*, to sell as cheap as possible: —*tanomimashita*, I have asked him again and again. Syn. KUREKURE.
(ヘボン著『和英語林集成』(三版)1886年)

さらに、再版と三版では「せいぜい」の類義語として「くれぐれ」を挙げているが、『日葡辞書』と『和英語林集成』において、「くれぐれ」は次のように記述されている。

- (13) a. Curegure. クレグレ (呉々) 一度ならずさらに. すなわち, Cayesugayesu. (返す返す)
(『邦訳日葡辞書』170頁)
b. KURE-GURE, クレグレ, 呉呉, *adv.* Over and over, again and again, repeatedly. (earnestly (三版のみ) —*mo o negai moshimasz*, excuse me for again and again asking you. Syn. KAYESZ-GAYESZ. (ヘボン著『和英語林集成』初版~三版共通)

このことからすると、19世紀後期頃の「せいぜい」は、同時期の「くれぐれ」に類似した「何度も」の意をもち、「何度も繰り返して誠心を尽して」という様態的意味で用いられはじめたと見られる。その後、『和英語林集成』の再版に比べて三版のなかに「最大限、できる限り」という意の「to the utmost, as far as possible」の記述とともに、「—*hataraku*, to sell as cheap as possible」という数量的表現を使う例が追加されていることから、おそらく1870年代以降、「数や量」または「能力や力」などの度合いが最大限であることを表す、程度性にかかわる意味が生まれたと推測される。ただし、現在の「せいぜい」のような、見積もった「上限」や「限度」を表すとりたてた意味の発生は、19世紀末以降になってからではないかと考えられる。これと関連して、明治期の辞典『言海』を見ると、「せいぜい」について、『和英語林集成』と同様に「できるだけ、できるかぎり」に似た意味のみが記載されている。また、同辞書に見える「た

かだか」の記述と比べてみると、19世紀末頃の「せいぜい」には程度を見積もる意味がまだ発生していないものと見られる。

(14) a. せいぜい (副) **精精** カノ及ブタケ。竭力

b. たかだか (副) **高高** 十分二積リテ。「一十人位」

(大槻文彦著『言海』1889～91年)

以上のように、本稿では、『新語源辞典』において「せいぜい」が「真心、誠心」を表す「精誠」から、明治以降「精一杯」に類似する形で現在の「せいぜい (精々)」へと取って代わったとする語源説にしたがって、明治期を基準にしてその前後の例を調査した。今回の調査では、管見の限り現在の「せいぜい」の出自とされる「精誠」は、中世や近世の資料には散見されるが、明治期に至るとその例が見当たらない。また、明治初期の資料においては、現在の「せいぜい」のもつ「たかだか、たかが」に類似した意味で用いられた例は見当たらず、語源の「精誠」のもつ「真心、誠意」を尽くすこと」を表す副詞的用法の例が散見される。

(15) 及バズながら御力となり精々御世話を致すつもり何は兎もあれ

(高島藍泉『巷説兎手拍』初篇上の巻・1879年)

(16) 時宜に寄り々々用捨可仕様にハ相成がたく候段精々御論申上候通りに候間御疎略なき儀とハ存候得ども (條野探菊・染崎延房『近世紀聞』三編卷之一・1881年)

そして、上で見てきた明治初期資料において、「せいぜい」は「精精 (精々)」と漢字表記されている。明治以降の「せいぜい (精精)」の意味は、おそらく語源の「精誠」の「精」または「誠」と関連していると思われるが、どのようにして中世・近世の「精誠」が明治以降の「せいぜい」に代わっていったのか、その詳細は定かではない。現時点で考えられるのは、似通った意味の「精」と「誠」を、または「精」を2回繰り返し表記することと関連づけて推測してみると、「精を出す」ことにさらに繰り返して「精を出す」ことから、「精を十分に出す」または「すべての精・誠を出しきる」という意になり、そこから「せいぜい」は、同時期に既に副詞として使われていた「精一杯⁹」に類似した形で副詞的に用いられるようになったのではないかと考えられる。このことから、副詞的用法をもつ「せいぜい」は、明治に入って使われはじめるものと見られる。

4. 近代語における使用状況

使用初期の明治期から昭和初期までの「せいぜい」の用例をみると、「せいぜい」の用法にいくつかの相違が見られる。そこで本節では、その相違によってまず「せいぜい」を、修飾語として用いられる用法 (以下、修飾用法) と述語になる用法 (以下、述語用

法)に分けて論じる。さらに修飾用法は、動詞や(形容動詞を含む)形容詞述語にかかる場合と名詞述語にかかる場合に分けられる。以下で、各用法の詳細を見ていく。

まず、修飾用法の例を取り上げる。次の「せいぜい」の例は、主に「御世話を致す」「御論申上候」「骨を折て」「聞合せて遣らう」「読んだ」「洗物を片づけた」のように動作や行為を表す動詞述語にかかる場合であり、(21)(22)の「せいぜいと」のように「と」を伴うこともしばしば見られる。後接の動詞述語は、断定の表現もあれば、命令や意志などの行為要求表現と共起している場合もある。このときの「せいぜい」は、明治以前にあった「真心・誠意を尽くすこと」を表す「精誠」を引き継ぎ、明治初期に入って「精を出しきって、力の及ぶ限り、できる限り」という意味を表す様態副詞用法で用いられている。このように使われている「せいぜい」の例を「I類」と表示する。上記の3節で挙げた『和英語林集成』の再版・三版の「せいぜい」は、この「I類」の用法に当たると思われる。

< I類:「せいぜい+動詞述語(断定または命令・意志表現などの行為要求表現と共起) >

(17) 及ばずながら御力となり精々御世話を致すつもり何は兎もあれ

(高島藍泉『巷説児手拍』初篇上の巻・1879年)

(18) 時宜に寄り一々用捨可仕様にハ相成がたく候段精々御論申上候通りに候間御疎略なき儀とハ存候得ども (條野探菊・染崎延房『近世紀聞』三編巻之一・1881年)

(19) (山田屋兼吉)「別に何うといふ考へも無えが女の前尻の世話をして無理に利を得様とも思はねえ精々骨を折て夫で御用が出来ザア天命だと諦める迄の事サ」

(条野探菊「涙の媒介」『太陽』・1895年)

(20) (お鏡)『最うお止しよ那樣事ばかり言つて。お前さん今夜は何うかして居るね。』(金公)『はゝゝゝ。なにお前がそれほど気を揉むんなら、俺もま精々聞合せて遣らう。まア注ぎねえ。』と飲干した猪口を出す。 (川上眉山「左巻」『太陽』1901年)

(21) 学費を親から出して貰う友達にも負けぬように学問したいと思って、心理学や倫理学などを精々と読んだが、 (田山花袋『田舎教師』1909年)

(22) 朝九時過ぎになつて止宿人の朝飯が済んでしまふと、お京は姉のお重と二人で台所へ行つて精々と洗物を片づけた。 (谷崎精二「淋しけれども」『太陽』1917年)

次の例は、上記の例と違って、「^{いや}忌になつた」「渋苦く((頬を)にッと引き歪め)」という情意・感情を表す語を修飾するものである。このときの「せいぜい」は、思いや気持ちが高点に達している内容にかかっており、上記のI類の「精を出しきる」のように、「思いや気持ちを出しきる」と解釈でき、「極力、できる限り」に近い意味で用いられていると思われる。そのため、次の例もI類として分類しておく。

(23) (才東)「高等官試験を受けたら^{ようよ}玄慶が知らぬが、私立学校出のデシマルでは^{しかのみならず}逆もウダツが上らないと定つてる。と云つて朝から晩までコキ使はれて 加之に宅調べま

で背負せられるから高等官試験の準備をする時間はなし、精々官員は忌になつた。」

(内田魯庵「丸之内」『太陽』1901年)

- (24) 鈴型の、籠に^{まがき}禿菊を染附けた番茶々碗を、大きな掌の平のうちに、鼓のようにポンポンと打ち鳴らしながら、その間にいつか血の色の消え散った頬を、せいぜい渋苦く、にッと引き歪め、落ちつき払って (里見弾『多情仏心』1922年)

次に、以下に挙げる「せいぜい」の例は、上のⅠ類と同じく主に動詞述語にかかる場合であるが、上のⅠ類のように精を出しきって動作や行為を行う状況ではなく、「せいぜい」の前後に否定形式を伴った表現や「何々することは無理だ」のような語彙的な否定的内容が現れ(各例の点線部分)、当該の動作や行為を完全にまたは十分行うことができないような状況で使われている。ここで注目すべき点は、この「せいぜい」の前後に現れる否定形式を伴った表現や否定的内容は、「せいぜい」の文と対比するまたは比較する内容であるという点である¹⁰。このような構文的状況によって、「せいぜい」はできる範囲内の代案または最善策をなんとか頑張るって行うという意味になり、上のⅠ類の「精を出しきって、力の及ぶ限り」などの様態的意味が、「できる範囲でなんとか頑張るって」という意味に読み取れると思われる。換言すると、次の「せいぜい」には、できる範囲または力の及ぶ範囲の「上限」や「限度」の意味合いが生まれ、その「上限」や「限度」を超えない範囲内で考えられることを、なんとか頑張るって行うという意味が発生しているといえる。また、Ⅰ類と違って、次の「せいぜい」の文には、数量詞を含む例が見られはじめるが、あくまで「せいぜい」が修飾する範囲は、その数量詞を含む動詞述語である。なお、「せいぜい」の文には、副助詞「でも」や「だけ」と共起、できる範囲内で考えられる代案を副助詞「でも」で例示したり、副助詞「だけ」と共起し、できる範囲または力の及ぶ範囲が限定されていることを表すこともある。以上のように使われる「せいぜい」の例を「Ⅱ類」と表示する。このⅡ類は、向坂(2009)で言う「せめて」に類似する「せいぜい」に該当すると思われるが、意味的には「せめて」に置き換えられても、構文的には「(希望・命令・依頼・意志・期待などを表す)モダリティ表現」との共起制約をもつ「せめて」の用法とは異なる特徴をもつものと見られる。

<Ⅱ類:「せいぜい+動詞述語(前後に「せいぜい」文と対比・比較する内容が共起)>

- (25) 『A君。』と私は膝を突合せて居る友達の顔を眺めた。『斯うして天城を越すやうなことは、一生のうちに一度か二度しか有るまいね。』『さうさな、精々もう一度も来るかな。なにしろまあ能く見て置くだね。』斯うA君が答へた。

(島崎藤村「旅」『太陽』1909年)

- (26) 局長、参事官、次官、大臣と都合六七度印を押して始めて物になる始末では困るでないか。換言すれば七つの關所調べを受けねば通る事が出来ぬ仕組である。それを事務の中心たる局長獨りで以てドシドシやれば精々三度位の關所調べで用が辨ずる。

(古賀廉造「行政税制整理問題・行政整理と事務の圧搾(論説)」『太陽』1909年)

(27) 話は又賑かな全快祝ひのことに復つた。誰にしても、當の無いことでも賑かな話に乾き切つて居た。「然し先生はお氣の毒ですな。病人ですから酒は飲めませぬ。精々サイダアでも飲んで、籐椅子の上からの酔ふのを見て居るんですな。」と岡村氏は又病人を揶揄して楽しませるのであった。(真山青果「一室内」『太陽』1909年)

(28) 「まあ自分の宅を有つという事が人間にはどうしても必要ですね。然しそう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄を心掛けたら好いでしょう。二三千円の金を有っていないと、いざという場合に、大変困るもんだから。(後略)」

(夏目漱石『道草』1915年)

(29) 僕は日頃大雅の画を欲しいと思つている。しかしそれは大雅でさへあれば、金を惜まないと云ふのではない。まあせいぜい五十円位の大雅を一幅得たいのである。

(芥川龍之介『文芸的な、余りに文芸的な』1927年)

(30) 私は生涯、この歩道の天幕の広告取りで終る勇氣はない。天幕の中は六月の太陽でむれるように暑い。ほこりを浴びて、私はせいぜい小っぽけな鉛筆をくすねるだけで生きている。(林芙美子『放浪記』1930年)

次の例は、動詞にかかっているという点で上記のⅡ類と類似しているが、主節ではなく、逆接の意味関係を表す条件節に使われている点が注目すべきところである。これらの「せいぜい」は、Ⅱ類と同じく「できる範囲でなんとか頑張って努力する」という様態的意味にも解釈できるが、特に例(31)のように「違う」のような状態を表す動詞と共起している場合は、意味の面においてはⅡ類に比べて「なんとか頑張って」という情態的意味が弱まっているものと見られる。このように、以下に挙げる「せいぜい」には、Ⅱ類と違って、「なんとか頑張って」という様態的意味が感じられるとしても、当該の文内容は、「できる範囲内で見積もっても、これぐらいになる」という程度を見積もるという意味が読み取れやすくなっている点が特徴的である。それに、「逆接の条件節(「ても)」の後、数量詞のような程度表現を含む述語と共起していれば、「これぐらいの程度になる(だろう)」という意味合いは一層増してくると思われる。以上のように考えると、(31)(32)の「せいぜい」は、Ⅱ類の「なんとか頑張って、できる範囲で(動作や行為を行う)」という意味ではなく、逆接条件節に現れるという特徴によって、「できる範囲でなんとかやっても、これぐらいの程度になる(だろう)」という意味で用いられていると考えられる。このように使われる「せいぜい」の例を、上記のⅡ類と區別して「Ⅱ'類」と表示する。

<Ⅱ'類:「せいぜい+逆接条件節(「ても)」(前後に対比・比較する内容が続く)、数量詞を含む程度表現を含む述語>

(31) 姉は黄色い疎らな歯を出して笑って見せた。実際五十一とは健三にも意外であった。

「すると私とは一回り以上違うんだね。私や又精々違つて十か十一だと思っていた。」

(夏目漱石『道草』1915年)

- (32) その当時八校あつた高等学校の視察を余に頼まれたのである、そこで余が言つたのである、本当に視察するには一校に一個月、精々節約するも少なくとも半箇月を要する、
(藤沢利喜太郎「ステファニック將軍を懷ふ」『太陽』1925年)

一方で、Ⅱ類とⅡ'類の特徴をあわせもつ中間的な例として、次の(33)(34)が挙げられる。(33)(34)は上のⅡ'類(31)(32)のように逆接の条件節が後接しておらず、構文的には前掲のⅡ類の用法に見えるが、意味的にはⅡ'類と同様に、なんとか頑張って努力するという意味より「見積もってもこれぐらいの程度になる」という意味をもつと思われる。例えば、(33)は「自分の生れた土地からは一步も出ず」「(出たとしても)五里十里のところ」という程度であるという内容で使われており、後続する動詞述語の「駆け歩く」にかかっているのではなく、「五里十里のところ」という程度の表現にかかっていると解釈できる。そのため、(33)は、「できる範囲でなんとか頑張って努力する」ことを表すⅡ類ではなく、逆接の条件節の表現(「出たとしても」)は文の表面に現れていないが、それが構文上に取り込まれていったと見られ、Ⅱ'類に入ると思われる。(34)も同様に説明できる。

- (33) この車夫も矢張怠惰と衰運との気分ですつかりその一生を腐らさせて了つたやうな人達の一人であつた。自分の生れた土地からは一步も出ず、精々五里十里のところを自分の生計のたつきのために駆け歩くだけで、あらくれた嬬と多い子供と拙い地酒との中に埋れたやうにして一生を送つて來た。

(田山花袋「利根川ペリのある町」『太陽』1917年)

- (34) 実子はめづらしい食慾をも覚えて、宿の茶碗に三つもかえるようになった。小さな茶碗でせいぜい二つぐらいしか進まなかつたほど、日頃の彼女の食はそんなに細かつた。
(島崎藤村『嵐』1926年)

このように考えると、ⅡとⅡ'類は「せいぜい」に後接する部分(逆接の条件節か否か)や様態の意味の度合いには違いがあるものの、Ⅰ類に比べると、意味の面で両者ともできる範囲の上限や限度を表す点、また用法の面で前後の文に「せいぜい」が修飾する部分の内容と対比・比較的な内容が現れている点や数量詞を含む程度性に関連する表現と共起している点において共通の特徴をもつといえる。

次の「せいぜい」は、これまで見てきた例と違って、名詞述語にかかるものである。構文的特徴としては、推量表現(各例の二重線で表示)と共起している点の特徴的である。また、数量詞や「でも」「ぐらい」などを含む程度性にかかわる表現は、Ⅱ類から見られはじめる特徴であったが、次の例は、そのような表現を含む名詞述語を修飾して

いる点でⅡ・Ⅱ'類とは異なるものである。このとき「せいぜい」の後にはほとんどの場合、数量詞を含む名詞述語が現れるが、次の(36)「美しい衣服の所望(でもあらう)」のように数量詞を伴わなくても、前後の文脈においていろいろ考えられる願いの一つに対比・比較するものとして「美しい衣服の所望」が挙げられており、程度性にかかっていると解釈できる。このように使われる「せいぜい」の例を「Ⅲ類」と表示する。このⅢ類では、Ⅰ類・Ⅱ類に比べて、精を出して努力する様子を表す様態の意味が薄れてほとんど感じられなくなっている。そして、Ⅱ'類と比べると、逆接的意味を表す「用言の連用形+ても」の部分も文表面上に現れておらず、Ⅲ類の「せいぜい」は、「多く見積もってもこれぐらいの程度であろう」と解釈され、「上限・限度」の意が一層強く読み取れるようになっていく。以上のように、これまで見てきたⅠ類Ⅱ・Ⅱ'類との関連を考えてみると、Ⅲ類の「せいぜい」は、文の表面上では名詞述語を修飾しているが、Ⅱ・Ⅱ'類の用法に見られる「できる範囲でなんとかやっても」という表現を意味の面でも構文の面でも取り込んでいるものではないかと思われる。これは、例えば(36)は「(一生一度の願ひだとしても)、せいぜい美しい衣服の所望ぐらいのものだろう」と解釈できるということで、Ⅱ'類から見られる逆接的意味を含み込んでいると考えられる。これと関連して安部2012では、とりたて用法の「せいぜい」は、「数量詞的に多いか少ないか」という程度性を述べる場合は「多くても」に、そのほかの場合には従属節「ても、としても」に置き換えられるとしている。

<Ⅲ類:「せいぜい+名詞述語(主に数量詞を含むか、程度性をもつ表現が来る)>

(35) 晦日の早朝、お菊は急に息が詰まって眼を白黒させ乍ら身悶えをし始めた。お京はあわてて近所の医者を呼び迎へると、代診がやつて来て又注射をした。『もう精々一兩日でせうよ。』さう云つて代診は帰つて行つた。

(谷崎精二「淋しけれども」『太陽』1917年)

(36) 『(前略) 夫では俊が一生一度の願ひを申し上げます』『オウ何で有るの。』前触は厳そかに手数が懸なけれども、精々美しい衣服の所望でもあらうと思ひ設けた。

(前田曙山「息のぬぐみ」第一回『太陽』1925年)

以上、修飾用法の「せいぜい」の例を見てきた。以下では、「せいぜい」が述語として使われる例(飛田・浅田1994の「述語になる用法」に該当)について考察する。今回の調査では、明治後期頃から述語用法の「せいぜい」の例が見られはじめた。これらの例は、おそらく修飾用法のⅢ類から名詞(句相当)の部分が取り込まれてきたものと考え、Ⅲ類からの延長線上で連続的に捉えることもできるものと思われる。このときの「せいぜい」には、Ⅲ類と同じく、Ⅰ類やⅡ類(Ⅱ'類)にあった様態的意味はほとんど感じられず、Ⅱ'類から発生したと思われる逆接的意味を含みつつ「(できる範囲で見積もっても)この程度になる(だろう)／これ以上は無理だ」という意味合いが際立

っている。

<Ⅲ'類:「…は～がせいぜいだ／であろう」>

- (37) 同じ歳の夏休は、矢張去年どおりに、向島の親の家で暮らした。その頃はまだ、書生が暑中に温泉や海浜へ行くということはなかった。親を帰省するのが精々であった。
(森嶋外『キタ・セクスアリス』1909年)
- (38) 「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。こう、親方の前だがね、つい過般もこの手を食ったよ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だろう。利くものか(後略)」
(泉鏡花『歌行燈』1910年)
- (39) 米国は非常に雄大なる計画を立てて七百余万噸を来年上半期までに完成するとカんでをるがそれは恐らく理想に止まり、明一箇年間の実現額三百万噸に上るが精々であらう。
(浅田江村「千賀博士の『日本の欧州戦乱に対する地位』と連合国の現状」『太陽』1917年)

以上、「せいぜい」の用例を構文的特点を概観し、Ⅰ類～Ⅲ'類まで5つの用法に分類した。時代別に各用法の用例数を表示すると、次の表1¹⁾のようになる。

<表1>時代別の使用状況

年代	用法	修飾用法			述語用法	
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ'	Ⅲ	Ⅲ'
1870		1				
1880		2				
1890		2				
1900		13	3		1	1
1910		3	3	3	2	3
1920		11	2	3	8	1
1930			1	1	1	3
1940		2	2		2	

一方で、現在の「せいぜい」は、Ⅰ類やⅡ・Ⅱ'類より、数量詞を含む程度性にかかわる表現と共に起したⅢ・Ⅲ'類で主に用いられ、「たかだか、たかが」に類似した意味で使われている。このような現在の使用傾向によって、Ⅰ類Ⅱ類で使われても、Ⅲ・Ⅲ'類のもつ「上限・限度」の意味の影響で、本来の「精を出しきって、精一杯」「なんとか頑張って」という力の及ぶ限り努力するという意味ではなく、「[高が知れているが/大したことは期待しないが]、それでもなんとか頑張って」という意味に読み取れてしまうこともある。このような現代語におけるⅠ・Ⅱ類の用法を、仮に「Ⅳ類」としておく。例えば、上の1節で挙げた例(1b)は、Ⅳ類としての用法として、純粹に「で

きるだけ、精一杯」という意味ではなく、実際では「たいしたことはできないが、できる範囲で楽しく遊ぼう」という読みか、もしくは「楽しく遊んで生きていくぐらいのことしかできない」という読みにもなりうると思われる。

- (1) b. 「おい加藤、人生は短いんだ。せいぜい楽しく遊ぼうじゃあないか。けちけち金をためて、なんになる。それよりも、その金で女でも抱いて見る、いいぞ」

(新田次郎『孤高の人』1969年)

5. 意味の変化過程と特徴

前節では、近代語における「せいぜい」の使用状況を観察したが、そこにはⅠ類、Ⅱ・Ⅱ'類、Ⅲ・Ⅲ'類の用法があることが分かった。本節では、それらの用法に見られる「せいぜい」の意味変化の過程と特徴について考察する。

「せいぜい(精々)」は、「真心、誠意」という意をもつ「精誠」から出自した語とされ、明治以降、副詞的に使われはじめたと見られる。初出例の意味は、語源「精誠」のもつ「真心、誠意を尽くすさま」の意から「できるだけ、精一杯」のように「全力を出しきって努力する様子」を表すようになった。この過程には、類義語の「精一杯」と似た形で、「精と誠(または精)を重ねて尽くす」ということから、精を一杯または十分に出すという意味で用いられるようになった背景があるものと推測される。

このように19世紀末頃、副詞として使われはじめる「せいぜい」は、使用当初は、Ⅰ類に見られる「精一杯、できるだけ、極力」のような「力の及び限り十分に努力する様子」の意で用いられていた。次に、Ⅱ類では、力の及ぶ範囲が限定され、精を十分に出しきれない状況のなかで、できる範囲内でなんとか頑張る努力することを表すようになった。また、Ⅱ類以降は、「せいぜい」の前後に、「せいぜい」が修飾する内容と対比・比較する内容が現れていることや数量詞を含む程度性にかかわる表現と共起しはじめている。さらに、Ⅱ'類では、「精を十分に出して・精一杯」の様態的意味の希薄化し、「見積もっても(～ても)これぐらいの程度になるだろう」という意味が強化する。Ⅲ・Ⅲ'類に至ると、「限度・上限」の意味が中心的なものとなり、そこから「これ以上は{無理/できない}」という否定的なニュアンスが発生するようになる。注目すべき点は、Ⅲ類の「せいぜい」は、「精や思いを出しきって、精一杯」のような様態的な意味が薄れると同時に、Ⅱ'類から見られる逆接の意味を表す「用言の連用形+ても」の部分と共起せず、数量詞を含む程度性をもつ名詞述語を修飾することから、「上限・限度」の意味が前面化し、「多く見積もってもこれぐらいの程度であろう」という意味で用いられるということである。現在の「せいぜい」は、Ⅲ・Ⅲ'類で主に使われるようになった影響で「上限・限度」の意が前面化し、Ⅰ類やⅡ・Ⅱ'類で用いられても否定的なニュアンスが読み取れるようになったと見られる。

このように、「せいぜい」は、Ⅰ類からⅡ類に使われる過程で「精一杯」という様態的意味に加えて限度の意味が発生し、Ⅱ類からⅡ'類に使われる過程で「できる範囲で見積もっても、これぐらい程度にとどまる」という限度の意味が一層強化され、それがⅢ・Ⅲ'類に至ると、「上限・限度」の意味やそこから派生した「これ以上は（無理／できない）」という意味に変化する過程を辿っていると見られる。以上で述べてきた近代語における「せいぜい」の意味変化の過程を簡略に示すと、次の図のようになる。

<用法>	<意味特徴>
Ⅰ類	「精を十分に出しきるさま」
Ⅱ・Ⅱ'類	「精を十分に出しきるさま」＋「上限・限度」
	Ⅱ類：できる範囲でなんとか努力するさま
	Ⅱ'類：なんとかやってもこの程度になる（だろう）
Ⅲ・Ⅲ'類	（「精を十分に出しきるさま」） 「上限・限度」
	Ⅲ・Ⅲ'類：この程度しかないだろう（これ以上は無理）
*Ⅳ類（現在のⅠ・Ⅱ）「上限・限度」の影響で「高が知れているが、それでもなんとか頑張って」の意	

以上、近代語における「せいぜい」の用例を中心に「せいぜい」がどのように用いられているかをまとめた上で、「せいぜい」の意味がどう変化してきたかを考察した。最後に、「せいぜい」に類似する意味をもつとされる「精一杯、せめて、たかだか、たかが」などと比較し、「せいぜい」の意味変化の特徴について少し考えてみることにしたい。まず、「せいぜい」は、「精一杯」に似た形で、後続する被修飾語に対して「精を十分に出しきって」という様態的意味を表す副詞的用法として使われるようになったと見られる。また、「せいぜい」は、「精一杯」が述語用法で用いられるとき、様態的な意味より「上限・限度」の意味が強く感じられるのと同様に、「せいぜい」も述語用法の場合、「上限・限度」的意味がより一層際立って現れると思われる（例：「帰りの電車の中ではもう疲れすぎていて立っているのが精一杯だった。」「病み上がりで、近所を散歩するのがせいぜいだ。」）次に、「せいぜい」は、「せめて」と類似した意味変化の過程をたどっているとも見える。拙稿2012で、「せめて」は語源的に「狭める」という語と意味的に深く関連しており、もともと「しいて、つとめて」の情態的意味をもっていたが、中世以降「せめてこれだけは聞いてほしい」のように限度づけの意味を含む評価的意味で使われはじめた語であるとまとめた。両者ともに、中立的な意味から限度づけの意味合いが生じた変化過程を見せるが、「せいぜい」は「せめて」に比べて、数量詞を含む名詞句との共起が非常に多く、程度性にかかわる表現との共起制約があると思われる（安部2012）。そして、「せいぜい」と「せめて」は、程度性を表現する面において相互で逆方向の発想をもとにしているとも見える。すなわち、「せいぜい」は「多

くても」に、「せめて」は「少なくとも」にそれぞれ類似していることからわかる（工藤1977では、それぞれ「最大限」「最小限」という）。さらに、近代語においては、4節で挙げたⅡ類の「せいぜい」と「せめて」は、両者ともに「くらい、ぐらい」のような副助詞や数量詞と共起できる点や動詞にかかっている点では似ているが、「せいぜい」が「…に過ぎない」「～しか…ない」と共起し、修飾対象を「たいしたことでない、これ以上はできない」と否定的に捉えているのに対して、「せめて」は「どうしてもこれだけは実現してほしい」と肯定的に捉えているという点で、両者は相反する捉え方・評価を表すと考えられる。

また、「せいぜい」と「たかだか」¹²との意味関係について考えてみると、「たかだか」は基本的に数量的に見積もることを表す語で、「多くてもこの程度に過ぎない」または「たいした数量や程度ではない」という軽視する意味合いをもつものであるのに対して、「せいぜい」はもともと「精を十分に出しきって、精一杯」努力するという意味を出自としてもつことから、数量的に多く見積もるという意味はもともとあったわけではなく、上の4節で挙げたⅠ類からⅡ・Ⅱ'類を経ていく過程で「用言の連用形+ても」を取り込んでいく過程で、様態的意味が希薄になり、「上限・限度」の意味が強くなったことから成立したものと見られる。なお、「たかだか、たかが」は「せいぜい」に比べて、名詞述語との共起制約が強い傾向を見せているが、これは「たかだが、たかが」が数・量の程度の高さを表す「高い」を語義としてもつ出自的要因によるものと考えられる。

6. おわりに

本稿では「せいぜい」の副詞的用法が見られはじめる明治以降から昭和初期までの近代語を中心に用例調査をし、「せいぜい」の意味変化について考察した。「せいぜい」の意味変化の特徴については、今後「せめて」「精一杯」「たかだか、たかが」との相似・相違の観点から、さらに考察を進めていきたい。

【注】

1. 現代語の「せいぜい」に関する意味記述では、例(2)の「せいぜい」を中心に議論がなされ、工藤1977・1982・2000や安部2005・2006・2012において、「とりたて副詞」(工藤1977では「限定副詞」)として扱われている(詳しくは、2節の先行研究を参照されたい)。また、向坂2009は国会会議録を調査し、「せいぜい」の意味または用法は、「できるだけ、精いっぱい」に類似した用法と「せめて」に類似した用法とが衰退し、現在では「たかだか、たかが」に類似する用法がほとんどになりつつある」という結論づけている。このことから、現在の「せいぜい」は例(1)より例(2)のような意味で主に使われていることが窺える。なお、グループ・ジャマシイ(1998)では、(1)について「できるかぎり」の意で慣用的な表現としている。
2. 現代語の「せいぜい」は例(1)と(2)のどちらにも解釈されうするため、(1)のもつ「精一杯」の意味で相手を励まそうと言った言葉が、(2)の意味で解釈され、相手に誤解を与えてしまうこともありうる。これに関連して、向坂2009では、福田康夫元総理が北京オリンピック選手団に「せいぜい頑張ってください」と激励したことに対して批判的な意見が出されたというエピソードを取り上げている。これに関連して、ヤフーの知恵袋に掲載されている投稿のなかでは、大阪市内で、ある商品について売り手が「せいぜいお使いください」と言ったことに、ほかの地域では「ずいぶん投げやりな売り方だな」と感じる表現になるそう。ところが「せいぜいお使いください」と大阪で言えば、「ぜひお使いください。おすすめ品です」という意味になるし、また京都でも「せいぜいお気張りやす」とよく耳にするが、このときの「せいぜい」も「精一杯、頑張るね。」という激励の意味になるといった投稿が見られる。このように、「せいぜい」の使われ方には地域の差もあるようである。(出所：http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1212238757、http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1111296301を参照)
3. 今回の調査において、副詞として用いられる「せいぜい」の例は明治に入ってから見られはじめる。このことから、本稿では、「せいぜい」の意味変化を考察するため、一般に「近代」という時期、すなわち明治以降から戦前の「明治・大正期および昭和初期」の言語資料を、「近代語」と称して用いることにする。よって、本稿で用いる「近代語」は、日本語史を大きく二つに分けたときの「古代語と近代語」の近代語ではなく、日本史の時代区分でいう明治維新以降の「近代」における言語資料を指すことに注意されたい。
4. 工藤1977で「せいぜい」とともに「見積もり方・評価」の限定副詞として分類した語には、「少なくとも、せめて、たかだか、たかが」がある。このほかに、限定副詞として「ただ、まさに、特に、おもに、たとえば、むしろ」などが含まれている。
5. 工藤1977の「とりたて副詞」に関する定義は、その後の1982・2000において「限定、見積もり方といった、文の特定の部分の「とりたて」—表現されていない、他の同類の物事との範列(範例)的paradigmaticな関係の中で問題の語句に対してどのような取り上げ方をするかということ—に關係するもの(工藤2000)」となっている。
6. 注1を参照。

7. 漢語の「精誠」は、羅竹風主編の『漢語大詞典』(第9巻)に「①真誠」「②猶精神」を表す語となっている。また、『時代別国語大辞典』の上代編には掲載されていないが、室町時代編(三、727~8頁)には、「せいせい【精誠・誠精】」の項目に「どんなに細かなところまでもおろそかにすることなく、真心をこめてつとめるさまであること。また、その心からの誠意」とある。なお、『日本国語大辞典(第2版)』には、日本文献における「精誠」の初出例として「管家文章」(900頃)や『色葉字類抄』(1177~81)などを記載している。
8. 今回調査した近世後期資料においては「精誠」の例が見だせなかった。
9. 「精一杯」は近世にも副詞として用いられている例が見られる。(例:〔助六〕「その様な怠惰なことは」〔新兵〕「コレ／＼、己斗りでは心元ないが、其方といふ後立が有ば、そなたのいきやすめ、精いつぱいきんで見やう」(歌舞伎・世話物『助六由縁江戸桜』1713))
10. この特徴からも、例(23)(24)は、ほかの対象と対比・比較して「官員いひは忌になつた」「渋苦く(頬を)にッと引き歪め」ということではなく、完全にまたは絶対的にその「思いや気持ちを出しきる」ことを表すと考えられ、「極力、できる限り」の意のⅠ類に分類できると思われる。
11. 表1は、明治期から昭和初期までの文学作品から得られた例を表示したものであるが、同時代の資料として「国定国語教科書」に5例見られた。また、昭和20年~22年の「帝国議会会議録」からまとまった数の131例(開会日付不明の1例は除く)見られた。詳細は以下に示す。
- 「国定」:全5例 →Ⅰ類(4/5)、Ⅲ'類(1/5)
- 「帝国」:全131例→Ⅰ類(58/131)、Ⅱ類(10/131)、Ⅱ'類(5/131)、Ⅲ類(50/131)、Ⅲ'類(8/131)
12. 「たかだか」も本来はとりたての意味を持っておらず、上代には「首を長くして。待ち望むさま」を表す様態副詞として用いられており、中世資料においても「高高」という語形で声の高さや物の高さなど様態副詞用法であった。現在の「たかだか」のようなとりたて副詞の例は、おそらく近世に入ってから「上限」を表す副詞として使われていた「高が」に似た形でが既にの形で明治以降見られはじめると推測される。その詳細については今後さらなる調査が必要である。

【調査資料一覧】

今回の用例調査に使用した資料・索引は、以下の通りである。ただし、紙幅の都合により、コーパスを利用した資料の作品名は省略する。《上代~近世》『日本古典文学大系』(岩波書店)所収の諸作品/神保五彌校注(1989)『浮世風呂戯場粹言幕の外 大千世落本集』新日本古典文学大系(岩波書店)/坂詰力治(1984~1987)『論語抄の国語学的研究』武蔵野書院/来田隆(1991)『句双紙抄総索引』清文堂出版/来田隆(1997)『湯山聯句抄:本文と総索引』清文堂出版/深野浩史(1983~1989)『中華若木詩抄:文節索引』笠間書院/来田隆(2008)『中興禅林風月集抄総索引』清文堂出版/池田廣司・北原保雄(1983)『大蔵虎明本狂言の研究(本文篇)上・中・下巻』表現社/江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引・本文篇』明治書院/土井忠生・森田武・長南実(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店/井上章(1964)『天草版伊曾保物語』風間書房/近藤政美(1977)『こんてむつすむん地総索引』笠間索引叢刊/国文学研究資料館電子公開『嘶本大系』東京堂出版の第一巻から

第十六巻のデータベース／前田勇（1974）「穴さがし心の内そと」『近代語研究』第四集、武蔵野書院
《近代以降》「萬國航海西洋道中膝栗毛」「牛店雑談安愚楽鍋」「河童相傳胡瓜遣」「大洋新話鱈入
道魚説教」「當世利口女」「分限正札智恵秤」「青樓半化通」「近世惘蝦墓」「寄笑新聞」「近世紀聞（抄）」
「開明小説春雨文庫」「鳥追阿松海上新話」（以上、興津要編集（1966）『明治開化期文學集（一）』明
治文學全集2・筑摩書房）／「怪談牡丹燈籠」「圓朝叢談鹽原多助一代記」「英國孝子之傳」「眞景累ヶ
淵」「名人長二」（以上、興津要編集（1965）『三遊亭圓朝集』明治文學全集10・筑摩書房）／「高橋
阿傳夜刃譚」「嶋田一郎梅雨日記」「澤村田之助曙草紙」「金之助の話説」「巷説兎手柏」「蝶鳥紫山楮
模様」「冠松眞土夜暴動」「勤王佐幕巷説二葉松」「淺尾よし江の履歴」「慘風悲雨世路日記」（以上、
興津要編集（1967）『明治開化期文學集（二）』明治文學全集2・筑摩書房）／「情海波瀾」「汗血千里
の駒」「雪中梅」（以上、山田俊治・林原純生校注（2003）『政治小説集一』新日本古典文学大系明治
編16・岩波書店）／「佳人之奇遇」（大沼敏男・中丸宣明校注（2006）『政治小説集二』新日本古典文学
大系明治編17・岩波書店）／「細君」「春風情話」「浮雲」（以上、青木稔弥・十川信介校注（2002）
『坪内逍遙・二葉亭四迷集』新日本古典文学大系 明治編 18・岩波書店）／「慘風悲雨 世路日記」「三
日月」「最暗黒の東京（抄）」「滝口入道」（以上、谷川恵一・高橋圭一・中島國彦・池内輝雄校注（200
9）『明治名作集』新日本古典文学大系 明治編30・岩波書店）／飛田良文・李漢燮編（2000）『ヘボン
著和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』港の人／大槻文彦『言海』ちくま学芸文庫・筑摩書
房・2004年／国立国語研究所（2005年公開）CD-ROM版『太陽コーパス』：『太陽』（博文館刊）の1895（明
治28）年、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年、1925（大正14）年の通常号の全文／国立
国語研究所（2006年公開）CD-ROM版『近代女性雑誌コーパス』：『女学雑誌』（女学雑誌社）1894（明
治27）年・1895（明治28）年、『女学世界』（博文館）1909（明治42）年、『婦人倶楽部』（講談社）19
25（大正14）年の全文／『明六雑誌コーパス』（2012年公開）：『明六雑誌』明六社刊行の1874（明治7）
・1875（明治8）年の全号の全文／国立国語研究所（1985～1997）『国定読本用語総覧』第1巻～第12
巻三省堂／国立国会図書館「帝国議会議録検索システム」第1回～第92回（明治23年11月～昭和22年
3月）の会議録のテキストデータと会議録（冊子）画像（<http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/>）／CD-R
OM版『新潮文庫 明治の文豪』、CD-ROM版『新潮文庫 大正の文豪』、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』（『源
氏物語』の現代語訳『新源氏物語』と外国文学の翻訳作品を除いたもの）の諸作品 《辞書類》 羅竹
風主編（1979～1993）『漢語大詞典』漢語大詞典出版社／上代語辞典編修委員会（1967）『時代別国語
大辞典 上代編』三省堂／室町時代語辞典編修委員会編（1985～2001）『時代別国語大辞典 室町時代
編』三省堂／グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
／飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』pp. 112・113、東京堂出版／森田良行（1989）『基
本日本語辞典』角川書店／小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典（第2版）』小学館

【参考文献】

- 安部朋世 (2005) 「セイゼイ・タカダカ・タカガの意味分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第53巻 pp. 279～284、千葉大学
- 安部朋世 (2006) 「副詞セイゼイの意味・用法と「とりたて」の在り方」『現代日本語文法—現象と理論のインタラクション—』 pp. 193～214、ひつじ書房
- 安部朋世 (2012) 「副詞セイゼイと類似表現の考察」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻、pp. 401～406、千葉大学
- 林 禊映 (2012) 「副詞「せめて」の意味変化」『日本語学論集』第八号、pp. 158～174、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 工藤 浩 (1977) 「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』 pp. 969～986 明治書院
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法を求めて—」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』 pp. 45～92、秀英出版
- 工藤 浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩著『日本語の文法3 モダリティ』 pp. 163～234、岩波書店
- 向坂卓也 (2009) 「副詞「せいぜい」の用法変化」『言語コミュニケーション文化』第7巻1号 pp. 129～143 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会
- 仁田義雄 (2002) 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版

(いむ じよん 大学院人文社会系研究科 博士課程3年)